

学校子どもブログ活動の背景と教育的意義

The Background and Pedagogical Significance of Students' Publishing and Communicating Activities on School Weblogs

豊福 晋平* 辻 美早子** 町田 智雄*** 鷲尾 健仁****
Shimpei Toyofuku* Misako Tsuji** Tomoo Machida*** Takehito Washio****

国際大学* 一宮市立瀬部小学校**
横浜市立千秀小学校*** 新潟市立亀田東小学校****
International University of Japan*
Sebe Elementary School in Ichinomiya City**
Senshu Elementary School in Yokohama City***
Kamedahigashi Elementary School in Niigata City****

<あらまし> 学校ウェブサイトによる学校広報の活発化に伴い、クラブ・委員会活動の一環として児童生徒がページ制作や記事投稿の役割を担う学校子どもブログのスタイルが確立しつつある。本論では、これら活動の経緯にふれつつ、学校における積極的教育意義について考察する。

<キーワード> 教育方法 情報教育 学校広報 学校ウェブサイト コミュニケーション

1. 学校子どもブログ活動の定義

学校子どもブログ活動とは、学校広報（豊福 2008a）の一部として、児童生徒が特別活動の時間を用いて継続的にウェブページ編集やブログ記事投稿を行うものであり、発展的に、コメントやトラックバックによる学校間交流を行うケースを含む。

コメントやトラックバックなど、システムの双方向機能を利用する場合は、情報受付後の承認機能を用いて、指導者がメッセージの取捨選択を行うことが多い。

狭義の学校子どもブログ活動とは、以下の4つの条件を満たすものである。すなわち、

- ① 児童生徒による投稿編集作業が、学校の特別活動（クラブや委員会等）の正当な活動として認知されていること
- ② 児童生徒が作成するウェブページやブログ（weblog）が、学校の公的な広報活動の一部を担っていること
- ③ 当該のウェブページやブログはパスワード等の閲覧制限がなく、広く一般に公開されていること
- ④ 通年で継続的に運用されていること

したがって、もっぱら授業で扱う特定プロジェクトやトピックを扱った短期集中型のブログ投稿、交流学习、あるいは、児童生徒が個人の資格で参加する電子掲示板や SNS（Social Networking Service）での書き込みは、この定義には含まれない。

学校子どもブログ活動で特に重要なのは、条件の①および②である。

これまでの実践事例を収集した限りでは、公的な学校広報活動に児童生徒や保護者が参加する前提として、広報の校内体制が整備され、かつ、複数教職員によるウェブサイト更新が実現されている必要がある。

児童生徒による継続的な活動は、結果として全体の情報発信量を飛躍的に増やすので、そもそも教職員側からの情報が十分でないと、組織広報としてのバランスを欠いてしまうからである。

豊福（2008b）が示した学校ウェブサイトの成長段階としては、第2段階目に位置する日常的広報と信頼形成がほぼ達成された状況と表すことができる。

2. 学校子どもブログ活動の成立背景

学校子どもブログ活動は、小学校ウェブサ

イトの活発化に伴って自然発生的に成立したものである。現在、我が国でこの活動の中心的役割を果たしている愛知県一宮市立瀬部小学校の活動記録をもとに、成立までの背景を整理してみたい。

児童生徒の情報発信活動が、小学校の学校ウェブサイトにも本格的に位置づけられたのは2004年である。第1回全日本小学校ホームページ大賞（J-KIDS大賞2003）を受賞した千葉県印西市立大森小学校は、児童の情報委員会を組織し、児童が記事を掲載する「こども日記」と「おいしい給食」を開始した（当時はブログではなく、通常のHTMLによるページ構成であった）。

2005年度には、一宮市立瀬部小学校がパソコン委員会、神奈川県横浜市立千秀小学校が千秀発信隊を組織し、記事掲載を開始した。年度後半には、横浜市立千秀小学校側からの提案で2校間の交流活動が開始された。

当時は、ウェブページの記事を約1週間後にまとめて相手校へ送り、相手校は返事を編集してホームページに掲載するという活動サイクルであった。

2006年度には、一宮市立瀬部小学校、横浜市立千秀小学校、北海道斜里町立峰浜小学校、東京都江東区立辰巳小学校の4校間を中心とする交流が始まった。3校が同一の商用ブログを用いており、相互にコメントとトラックバックを行うことが可能となった（ただし、瀬部小学校は校内LANからブログ利用が出来なかったため、委員会の児童がテキストで打ち込んだ記事を校外環境から転送する作業が必要であった）。

表1 学校子どもブログ参加校の推移

	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	のべ
児童交流	1校	2校	8校	14校	20校	24校
教員からのコメント			1校	5校	4校	8校

2005年以降の児童交流校には一宮市立瀬部小学校の数を含む

2007年度には、各学校のブログ更新状況を自動的に統合 (aggregate) する「Japan Kids Blog」が横浜市立千秀小学校に設けられ、各地の学校ブログの更新状況が1ページで簡単

に把握出来るようになった。年度後半の交流参加校は合わせて19校に広がった。

一宮市立瀬部小学校の交流相手校の数を示したものが表1である。2009年2月時点で児童同士の相手校は瀬部小学校を含めてのべ24校、教職員を介した交流はのべ8校である。



図1 Japan Kids Blog

3. 学校子どもブログ活動の教育的意義

教育場面にブログを活用する効果については、Bull, G.ら（2003）やYing Xie, Priya Sharma（2004）による研究のほか、我が国では斎藤（2006）が大学のライティング教育でブログを活用し、受講者の情報生産のサイクルの定着を補助する、受講者の情報生産への参加意欲を刺激する等の可能性を指摘している。

先にも述べたように、学校子どもブログ活動は特別活動に位置付けられるため、教科領域の教育効果を直接論ずることは難しい。

そこで本稿では、経過を把握するため、特に拠点校として活動してきた一宮市立瀬部小学校の①年度ごとの変化、②抽出児童の変化とともに、③ブログ活動と従来の電子掲示板を用いた活動の違いについて考察する。

4. 瀬部小学校における年度ごとの変化

年度ごとの変化を5名分の記事を抽出して分析を行った。表2～5は記事中の文章数、

気持ちや様子が表現された文章数と対象者が明確か否かについてまとめたものである。

4.1. 2005 年度の記事傾向

パソコン委員会が設立された当初，所属児童は 10 名であった。誰に伝えたいかの目的意識が明らかでなく，ノートに日記を書くように日常の出来事を記述していた。

1 記事は 2～3 文で構成され，自分の気持ちや考えは最後の 1 文に記述されることが多い。また，様子を詳しく描写する形容詞等の使用が少ないのが特徴である。

遠足のこと 5. 18
万博へ行きました。
私は 80 分並んで「大地の塔」を見ました。
疲れたけど、並んだかいがあってとてもきれいでした。
5年 ちはる

表 2 2005 年度の抽出文

タイトル	文	気持ち	様子	誰に
野球部	5	1	-	4・5年
遠足	3	1	1	-
ゾマホン	3	0	-	-
家庭科	2	1	2	-
ふれあい	3	1	1	-

4.2. 2006 年度の記事傾向

記事は 4～8 文と長くなり，気持ちや様子の表現が豊かになった。また，相手校を明確に意識した記事が書かれるようになった。

2006 年 11 月 1 日
千葉県印西市立木下小のコメントに答えて
木下小からのコメント
「セベッコマンなんて、かっこいいですね！！木下小でもキオロシマン？をやってほしいです。」

「私も実は「元」セベッコマンでした。(歩こうマン) 歩こうマン・仲よしマン・おそうじマン・・・など役が決まっています。
会う人に「セベッコマン」と言われておかげで 1 年生の子たちとも仲よくなれましたよー。
キオロシマンできるといいですね。」
パソコン委員会 ゆりこ

表 3 2006 年度の抽出文

タイトル	文	気持ち	様子	誰に
山車の練り歩き	3	1	0	千秀小
手作りバームクーヘン	4	3	0	千秀小
木下小	8	2	1	木下小
白いじゅうたん	6	4	3	峰浜小
卒業写真	5	2	3	—

4.3. 2007 年度の記事傾向

10 行を超える記事も珍しくなくなり，気持ちや様子も生き活きと書けるようになった。気持ちを表す言葉がなくても気持ちが伝わる記事もある。

交流校から頻繁にコメントを受け付けるようになり，相手校のページを見る機会が増えたが，相手校の記事に対して，しっかりと返事が書ける委員はまだ少なかった。

2007 年 12 月 28 日
「市長さんへ」瀬部小 前期副委員長 6 年 チョコ
市長さん、うれしいエールありがとうございます。私は辻先生に、「市長さんから、エールがきてるよ」と聞いた時、「市長さんいれてくれたんだ、うれしい」という思いでいっぱいになりました。
市長さんとも、会えたとし、エール、も送ってくださって、私はこう思いました。東京に行つて、いい思い出も作れたし、市長さんとお話できたので、良い経験になったと思います。
(後半省略)

表 4 2007 年度の抽出文

タイトル	文	気持ち	様子	誰に
市長さん	10	3	2	市長
遊ぶ会	6	2	1	—
やったあ	12	5	7	—
千秀小	4	1	—	千秀小
ありがとう	10	—	2	亀田東小

4.4. 2008 年度の記事傾向

記事の構成文が長くなり，途中に箇条書きや会話、ランキングを入れるなど表現の工夫をするようになった。相手校の記事を読むのが早くなり，読んだ後に返信を書くことが出来るようになった。

2009年01月14日

下平川小ダッシュさんへ

「最近はやっている遊び」瀬部小学校パソコン委員会スーパーマン

最近はやっている遊びは、いろいろあります。

その中でもぼくがみている遊びで

一番はやっている遊びはボールをつかった遊びです。

たとえば、ドッジボール・バスケットボール・サッカーなど・・・です。(後半省略)

表5 2008年度の抽出文

タイトル	文	気持ち	様子	誰に
給食	6	1	2	—
市長さん	5	2	2	—
はやっている遊び	4	0	0	下平川小
書初め	5	3	3	鉢形小
練習	9	2	2	林小

瀬部小学校では、パソコン委員会が設けられた2005年以降、記事入力を行う環境や交流校の増加にあわせて、児童に対する指導を工夫し続けてきた経緯がある(この件については別稿にまとめる予定である)。

抽出文の簡便な分析をみるだけでも、文章表現力に明らかな変化が現れていることが分かる。

5. 抽出児童の変化

瀬部小学校で主に給食の記事を担当する児童1名の記述変化を比較する。

当該児童は2008年度の前期・後期連続で委員会に所属している。一方は委員会活動初期の5月の記事、もう一方は12月の記事である。

2008年5月13日(火)

「おいしい給食」パソコン委員会 やせたか

今日の給食は、スパゲティーナポリタンとクロワッサンとクラッシュフルーツゼリーと牛乳でした。

ぼくが一番おいしいとおもったのは、スパゲティーナポリタンです。

このスパゲティーナポリタンのどこが良いかというとやわらかいところです。それにくせになる味です。

なのでとってもおいしいです。

だからおかわりをしようと思ったらなくなってしまっていたので、おかわりができませんでした。

ざんねんでした。

2008年12月8日(月)

「今日の給食」瀬部小学校
パソコン委員会 やせたか

今日の給食は、ソフトめんと牛乳とソフトめんミートソースとシーフードステーキと亀田東小からもらったあられでした。

では、今日の給食アンケート

第1位は、ソフトめんミートソースでした。

第2位は、牛乳でした。

第3位は、あられでした。

第4位は、ソフトめんでした。

第5位は、シーフードステーキでした。

僕が一番おいしかったのは、

亀田東小学校からもらった、あられでした。

どこがよかったかと言うとまず、味です。

最初は、味がうすいと感じるけど後から味がだんだん濃くなるようなところと食べた後も口の中で味が広がるのでくせになります。

その次に感触です。サクサクしていてとってもよかったでした。

今日の給食は、とってもまんぞくできる給食でした。

給食レポートは、学校子どもブログ活動の中でも比較的ポピュラーな題材であり、取り組んでいる学校も多い。ただし、献立以外の要素、例えば味を伝えるのは難しく、多くの児童が苦戦を強いられる題材である。

当該児童は、「おいしい」を使わずに表現する方法を工夫し、7年半ばからは学級でインタビューをしたり、アンケート結果で表現したりするようになった。12月の記事では、食感や味の変化、食べた後の気持ちまで表現できている。

これらの変化を見てとれるように、学校子どもブログ活動は、児童の表現活動にプラスの効果をもたらしていると言える。

6. 従来の交流活動との相違点

では、ブログを用いた活動と従来から試行されてきた電子掲示板等を用いた交流活動とはどのような違いがあるだろうか。

学校子どもブログ活動と電子掲示板・SNSによる交流活動との違いは、次の3点にまとめることができる。すなわち、

①半年以上の継続的な活動期間、②適度な距離感と交流頻度、③社会的役割と責任の付与である。

6.1. 半年以上の継続的な活動期間

我が国の学校でウェブサイトや電子掲示板を用いて情報蓄積や交流を行う場合、活動時間を確保するには、特定の授業単元で集中的に扱うか、あるいは、特別活動のような形で継続的に扱うかのいずれかしか方法がない。

特定の授業単元に割り当てた場合は、学級児童全員が活動を体験できる反面、時間数が限定されてしまうので、活動自体がイベント的になり、児童生徒自身が文章を推敲したり、交流相手と親密な関係を深めたり、といった機会を十分設けることができない。

教師からの背景説明が十分でない、書き込み投稿自体が困難になったり、逆に、相手をわきまえず不適切な内容を書き込んだりする懸念がある。また、短い時間で活動を完結させるために、パッケージとしての完成度を高める必要があり、事前の準備や交渉のための負担が大きい。

特別活動で継続的に扱う場合、活動のサイクルを半年単位で設定できるので、前者のような問題は生じにくい。参加する児童生徒は、活動期間内に何度も繰り返して書き込み投稿や交流の機会が与えられるので、導入やスキルの習熟に十分な時間を割くことができ、相手校からのフィードバックによる動機付けの維持も期待できる。

ただし、特別活動では対象となる児童生徒数が限られるため、これを全児童生徒対象のカリキュラムとして一般化することは難しい。

6.2. 適度な距離感と交流頻度

交流活動を中心とした場合、電子掲示板では、書き込んだメッセージに返答や応酬がぶ

ら下がる形で議論が進行するので、タイミング良く返答（レス）が付かないと、議論の流れに乗れないまま放置される恐れがある。一方、返信が付いたら、できるだけ時間をおかずにメッセージを返さないと、今度は議論が停滞してしまう。参加者は最初から掲示板に双方向を期待するため、かなりの頻度でアクセスすることを余儀なくされる。

また、交流活動規模や対象校が多いほど、学校ごとの関わり方に格差が生じやすく、円滑なコミュニケーションを阻害する一因となりやすい。

コミュニティの親密度や凝集度が高くなるほど、新規参加者や低頻度参加者は、場所の雰囲気把握するための負担が増え、書き込みへの積極的な動機付けを失うか、前後の脈絡なく、しばしば不適切な内容を投入してしまうので、常連参加者との間にトラブルが生じやすい。

つまり、電子掲示板スタイルで参加者がコミュニティとの関係を円滑に維持するには、ある程度以上のアクセス頻度を維持する必要があり、掲示板に対する心理的な依存度も高くならざるを得ない。このような方法は、参加者・指導者ともに活動への負担が大きくなりやすい。

一方、学校子どもブログ活動は、パブリックを意識したウェブページやブログへの記事投稿がまず基本であって、フィードバックが得られることはプラスアルファの部分に相当する。

学校では、かならずしも毎日コンピュータの利用環境が確保できる訳ではないため、それぞれの事情にあわせた活動ペースの確保が重要である。コミュニティを中心に相互依存的状态を作りやすい電子掲示板スタイルと比較すれば、ブログ活動は各学校の独立性が保たれるので、心理的な負担はかなり軽減されるものと期待できる。

6.3. 社会的役割と責任の付与

児童生徒の記事投稿は学校広報活動の一部であるから、たとえ記事に個人のニックネームが付記されても、組織主体のフォーマルなコミュニケーションに位置づけられる。

特別活動（クラブや委員会等）では、これら活動が、学校運営に必要な「仕事」として児童生徒に割り当てられ、公的な情報発信者としての責任の付与とともに、校内での取材・撮影・編集等の特別な働きが認められることになる。

学校子どもブログ活動が活発なケースでは、委員会やクラブ活動における児童の働きが顕著であり、校内での注目度も高いので、取材活動等の「仕事」が下級生のあこがれになっている事が多い。仕事の責任の重さと、校内の期待をバランスさせることで、担当児童の動機付けを高めることにもつながる。

このような取り組みは、レイヴ、ウエンガー（1993）が指摘する社会的な実践共同体であり、仕事の習得・成熟過程は正統的周辺参加（Legitimate Peripheral Participation）に相当するものと言える。

一般に、組織のフォーマルなコミュニケーションは、パブリック（公）に対する情報伝達を達成するため、コード（規則）による多くの制約、私的感情の抑制、論理性や客観性の重視、といった特徴があると考えられるが、対個人のインフォーマルなコミュニケーションと比較すると、次のような点が指摘できるだろう。

① 組織としての情報発信は発信者個人を匿名化するとともに、多くのコード（規則）が逆にコミュニケーションのリスクやトラブルを低減させる。対個人のインフォーマルなコミュニケーションが、制約の少ない生身の感情や思考のぶつかり合いとするならば、組織のフォーマルなコミュニケーションが必要とするコードとは、生身の脆弱さを守る鎧や武道の型のようなものと考えられることができる。

② 一方、対個人のインフォーマルなコミュニケーションでは、コードによる制約が少ない分、リスクやトラブルを低減させるためにはモラル（内在化されたコード）が必要であるが、たとえ学校教育であっても、個人の信条に踏み込む可能性が高い道徳・モラル教育は、センシティブかつ慎重な対応が要求される領域である。

また、同様の理由で、個人の感情や情緒が表現された作品に対して、しばしば指導が求められるのは、コードへの適合を問うというよりは、むしろ、個人の人格や感性そのものを否定しかねないからであろう。

③ フォーマルなコミュニケーションのコードは、仕事を円滑に進めるための知恵やスキルとして外在化され、実践的に継承されるものである。学校の特別活動で組織としての情報発信活動が明確にターゲットされていれば、記事の書き方や取材方法に至るまで、実際の活動を通じて上級生から下級生へと伝達される事が期待できる。

また、コミュニケーションの公的な役割、コードによる制約や記事の特性は、指導者の添削指導をむしろ容易にするものと考えられることができる。

参考文献

- 豊福晋平(2008a) 学校評価を円滑に機能させる学校広報. 日本教育経営学会第48回大会自由研究発表Ⅷ
- 豊福晋平(2008b) 学校広報を前提としたウェブサイト導入プログラム. 日本教育工学会研究報告集 JSET08-4, pp.155-160
- Bull, G., Bull, G., Kajder, S. (2003) Writing with Weblogs: Reinventing Student Journals'. *Learning and Teaching with Technology*, 31 (1), 32-35.
- Ying Xie, Priya Sharma (2004) Students' Lived Experience Of Using Weblogs In a Class: *An Exploratory Study*. *Association for Educational Communications and Technology*, ERIC #ED485009 (参照日 2009.02.06)
- 斎藤俊則(2006) ライティング教育におけるブログの活用. *IPSJ Symposium Series Vol.2006, No.8*, pp.125-130.
- レイヴ,ウエンガー(1993) 状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加. 産業図書, 東京.